

月曜評論

新国際環境の中での政変

国際政治が七〇年代前半の人口会議、食糧会議が世界会議「緊張緩和」の時代へ向って所在をいやがうえにも明らかに一九六九年であった。それから五年たった一九七四年は、国際外交を主導してきたキッシンジャー米國務長官が最近、激しい流動と新しい課題を伴って、七〇年代後半、ひいては二十世紀最後の四半世紀に突入しはじめたことを知らせている。

「緊張緩和」の時代へ向って所在をいやがうえにも明らかに一九六九年であった。それから五年たった一九七四年は、国際外交を主導してきたキッシンジャー米國務長官が最近、激しい流動と新しい課題を伴って、七〇年代後半、ひいては二十世紀最後の四半世紀に突入しはじめたことを知らせている。

「緊張緩和」の時代へ向って所在をいやがうえにも明らかに一九六九年であった。それから五年たった一九七四年は、国際外交を主導してきたキッシンジャー米國務長官が最近、激しい流動と新しい課題を伴って、七〇年代後半、ひいては二十世紀最後の四半世紀に突入しはじめたことを知らせている。

「緊張緩和」の時代へ向って所在をいやがうえにも明らかに一九六九年であった。それから五年たった一九七四年は、国際外交を主導してきたキッシンジャー米國務長官が最近、激しい流動と新しい課題を伴って、七〇年代後半、ひいては二十世紀最後の四半世紀に突入しはじめたことを知らせている。



中嶋 嶺雄

しかし、気がついてみると、これら諸課題の解決と調整の問題こそ、世界各國の利益や利害を越え人類の重大問題として深い溝口を開けていたのであり、本七四年にいずれも国連主催の資源会議、海洋法会議、開発などの問題がにわかにク

もどより、今回の日米共同声明やそれに先立つ十一月十四日

派な建築家というよりは、たんのシカゴ大学でのキッシンジャー提案にみられるように、資源・エネルギー問題に端を発したその大構想の基礎づくりは一向に進まず、ただ補強を加え、割れ目が広がらないようにしているだけでないか」と皮肉って

(東外大助教)